六論衍義大意

口仁9
1296

門 仁
帙 1.296
巻

六論衍義大意

孝順父母

凡世間にある人貴となく賤となく父母乃うまれざる人やあらぬ。されば我身は出来ることなれば。事とおもふ事なり況や養育の恩山よりも高く海よりも深しこうして思へば今孝順よりたくんとなくば父母に恩をかへすべきなり。

先十月の懐胎ありしより母をくるむ。

明治四十年一月廿三日
中村健氏寄贈

ちゝ生れぬ〻幼稚の子を父母とする貴賤貧富
幸苦をいとはず常のたゝき用ともひゝ抱そゝて
あゝも病ゝ出りしれい神祈の驚ともとめ我身も
如てとり殺すとり思ひ。ひたゝすれ悪業にて成長するを
嫌ゝ捨ゝ殺ゝ仏の教の報ゝ恩ゝ報ゝ長ゝくなれも。
きたゝめゝ師を撰ひ驚ゝたゝ人ゝもゝ行ゝと
思ひ家をもわきまゝるゝ孝ゝ養ゝ孫ゝとゝ婦を
むゝゝゝちゝゆゝまゝとゝひゝゝゝ又ゝ主ゝ両ゝ主ゝを

みゝゝゝ或ゝゝゝ

ほい大うと側をまれす。出へるに色とひさうしろを
ひく〳〵寢具うに新しき川めり朝い着色〳〵父母其病あ〳〵い
蒙暇願とかす他事をすて〳〵看病〳〵醫薬のために
乃をんを尋ねく〳〵ちく〳〵中一二三日色を事いうかと
父母の所を尋ねるも夫を安せんと大なる
不孝とふ色〳〵何事も父母の教訓よりたつる。
あををおんしらく所をたもつて。もを
ひくことなるをみる。父母の命令の第拾

いうとのうろこひとの赤ゐ色を父母に赤と黄色と
云なりたく當れなるべしおもへさ父母病生乃日
なる事と今此時〳〵乃く尋ねをいとさすに父母
死〳〵後いふ物〳〵ものへ色をやたとひ山海乃
珍味とうまく〳〵を供ふるも病の蔬菜にハ
たとへいつなれ今世乃人父母の書と大切のも
おりとさるや最初乃妻子とうとも書るに
先〳〵ひ先〳〵ひ先〳〵ひ先〳〵

さる程に父母なりし人のまうし給ふ者共をたのもしうく
覚しんと記さるゝ人今は世やう覚しんありとみゆる人も
人のこ妻をめとりまうけてまうすなれば眼前
妻まうけ給ひてひとりのつゝ朝夕のたとめさへ
おこしるとくやしとふも思ひ給はるれよりかゝぬ
妻まうけいつとなく父母の思ふ事をまうけ
きこえ給ふ事にはんりつれいこしも父母をうとましふ
なりゆくこゝろいつよあさましき事なれなりひみよ

我身十四又厳しくい妻とえるのまうけ
ものあり此時我と養育せしに人になりゆくや我を
父母抱せし人に何人ぞや父母と叫ぶ妻をまうけ
なりゆくやあるを高しきに百姓とそ親しくあり
百姓とそまうけ人にて不孝なる人にまうけ
さうくて倉獄まうけおとうとうとまうけ
愚き事なり

尊敬長上

古より今に至るまでくはり大なる世界にてもなるべき人民なれども唯一つの礼義よりくさくさまでと知るべしいつのころより礼義といへい自侵と市の差別をさくらたるなる人と為さ人との沖事をみさらぬ事なり。特中自侵は重き事なれども自人を特して無礼なる人世とゆるさぬ事なれば第一まても自侵は同いをのつから礼義を存するものされた

自人を尊敬するべ人のみなる事なれば今さら家ふつふつ侵は長とより父母より格別なるふさ沖く長上を尊敬するべ第二は兄弟より長上をつい指らう。第三は他人のうちにある人をつまりまつ一家にいて男女をいそすのの親者なる人ばかりなれば但し長上を尊敬するの人の親しきはかりはまるべしうけ指らはんをんり生れく遠ずは父小代る人なれば父母より沖く

弱のへさいはての兄まあらずやたとひ父母
別宅にあるとも書に事あるときへ家財を
配分する事相違なりとも兄の裁判
をもつへし兄あり出入のよりて兄弟はたらきこと
先づ兄より第兄より次に我身に加へも
始末者なれとも兄をとむへうすそれ
父母無きに一族のうち年たけ人とそれよ
れ義をあらそはんことあるを親
族の悪うすして
長上と尊敬する事をもつてさるや或は妻子の侍
まゝに或は賢財の欲にひきくやもすれを
不和なりて兄弟親族たりひあるそひも
なりへ天性背国にして他歌の
あるいとなりを事なりと他人へくそ
手を拳給ひて兄と同事なる人と父子
やまり屋一つの兄と同事なる人と兄弟

準して孔子郷村をおけまうく。
一族乃至合てい勇ひとを引さけ〳〵情たまふと
なり雪人さへうけてこと況や常体の人すこしも
弱りあるとりたるまひわるへうす産さるときい
かに世ゆ時い強りて形屈しかりてあるも長こを
さしおゆる事なるへう況長これおすそはまつせく
定言に異なる事りて敵き事するけてられて云後
なる事あり。ふで〳〵是といまひへ又長この中そ。

そ移ひぶ〳〵人の境ともなる人いつよりなるす
その外藝能ありへ人の師匠するる人を列して
是を敬ふへ又我りて位たりき人いさとひ年弱
ありへ林憲なりしとすて我こと立人るれて
あれまへ長こなり常ふ孔義と存てあるとるん
ある人へ況されいあへ人へりて位なる人賢憲ある人
老年ある人あれとこ川の童子とて天下たり日うへ
弱冠き人とするなり降れせり有へ時樂て

ほうくわたりこゝろつとんて老をうやまひ
徒と弱き事と高く侮らずなけく愛き事なり

和睦郷里

凡都鄙と論せず同じ郷村に住する人は先祖
代々家業を祈りかつひはたひ人〻別習われて毎日
むつまじく交れとも他国にあり我家の人〻
あらくいとなつ〻ず親族と思ひとなすへき也

同じ郷村の人〻常に疎略ふさ為ふさる事な
きやうにいのちなれば今世の人一旦のいきは
いつのときにかはりなく日〻にかはりみを忘るゝや
むなしき事なり或は同宅のちのひを爭ひ或は
金銀の債をとゝらく双方いとり遠ふ公事
訴へをもなすふ一郷村はちをとゝもなるべし乃
治をとつゝるゝ親朋の眞願するんなりむまり
常〻ことを是をとして人を邪とゝ利をのゝ

人は害をもつてみを元とす我世にうまれてより
人おとゝ不同一なり強て人とせんとすれば
本有の国一所事も人のごとくなるひとりとして我所
ひとつとなるべからざる所なり我も人もさやうふと
ん所へ出てこれなきの和睦せざるべし但大学にも
家を出ずして教を国に施すなり所謂先我一家の
むつまじきを本とす父母に孝行し長上に敬
みちいやしからざる論をもれば今又つゝしむべき夫婦の
道を重しとなす妻を去ることは
大法あり婦人淫乱なるの男姑に逆ふるの
嫉妬ふうるの過ありとすれば法のごとく去べし
然れども妻親の家なりて悪さ所なきの
我と年頃父母の妻とするふるの又おろかく貧賤
のゆゑ富貴なられば大なる不義の所行
なりて去ることあるべし世をみる所或いは妻の親族も
常に恩義あるべきなり或いは妻に法せる事

なるを見て多年其別を忘れざるは稀なるもあり何まで〻いとしくの法たうひく事の有さまなるいつくしみ孝行の人父死して父乃妻と妻となるものなり人倫をみだりがましくしたる邪ちの孔親の後妻とする事法にもなきこと也なり孔郷村にある人に法に義と教へ吟味すべしてわすれたるのをいとて法ひとり

ふるこひ市とのくのやうに問ひ宮りの事と云なり○もし孔義を奉ずべし○水決盜賊不忠の類あらば其はて命して酒を飲て敢撲へし

形孔悪さ人と云義なも遠く慎へし○賢憶ある人を敬ひ学問ある人を親しみ技藝ある人をやめなり○孝能なる人を誘さ爭ひよ及ものをとりあつひ勢りを つひ人をとひ慰め孤児寡婦老病ある人をいたみあもれを困窮乏しき人を賑り郷乃人

たがひ合て一家親戚睦み和睦
せさる事やあるべき

教訓子孫

凡世間家々に子孫と重しとて子孫人々らるれ
家も亡ぶる人々あり又れ家も衰ぶられみる人の
志る事なれ大家小家とも惟う子孫乃ちきを
ねがはさるべき他ちの子孫生れなくしてさい

わいなり世間の人々乃その教訓のたい初雅乃
時乃事不仕見ぶたるべ言とく事さけら者をに
教ふ者と志るしめさて意借ぶなきやうてと
いまりめ都鄙ぬ志つ心のなるあといまりめ事を
ほとむるまたてこぬやうみといまめ人てまなる
了ぶ紅花なきやうまとつまむ朝夕出入て
常ゝんと背くみうたて絶縁をいるす人々に酒食
衣服と共に常ゝ賜と制ゝ自他ゝ見るとうさむ

庵に沈湎一切を忘れ、ひたすらに日を
費す事あるべし。古人の第一に述べたる事
すみやかに近代の事にとうかがうも超世傑の乃
情あるべし。庵にすむ時、浮雲の如くまよわざる
べし。世間の事、夢文とさとり、聖賢の乃とまなび
庵に籠りて生涯を送り、徳をもって
名とあるべし。世をも顧みるべからず。又人の
[illegible]

なかるべきなり。如何に道理の事を聞きたりとも
及ばず、平生素和を本として何事も穏便を伝
ふべし。婦人の乃
婦となりても男女にたがふべの女なる
なつけ、家内をおさめとるべし。繁昌の福も
あるべし。近代、素文祖父の著数冊あり。
そこの孫にそなうべし。眼前の愛し隔れば
一切の所領衣服言語挙動まねべし。小児は義道をまなべ

らんとこそ思ひしかるに子孫たるもの初めより一言乃
ち語をさへ一生涯の事をみをとろへ智り俳と
なれば教戒をもなすべく侍りも礼義の正しき事を
ちらしたまへ学文をすむとも人倫みちを
教へんとせずして利の縁とする
たりそ子孫たとひ学文すとも人理をおろ
かの自得すべき我門れ初ひ初れる家の業あるべん
ばるべとて武貨財を貪り或酒をこの脫りたり
悪名をとり勇をはづかしめて父母も親戚をも忘れ
ぬ文学をも家業とせるときは貴門のはるる言語よ
をこの者すべて人を嫁しても家を治る事
ぶてすして退出さる者も世をまたためたる
是ぬしもの孫はとのたにもあらはれみ貴門乃
はたらかの者なり志の親の意世をもうむる
ばかりやの孔子もまたとも世せ若者をさせと宣へ
なりもあるべき事なり

各安生理

天地の間に生るゝ所の人、貴賤貧富を論ずる事なく、人々我身あらゝる所作あり、是日々の生涯につきて、安らかなる生理と名つくべし、生理よ[illegible]ばなれて外をもとめさるべし、つとめなり、志ある人の形をもちゐて先王の[illegible]ものゝ学文と武芸をたしなむ義理を日々[illegible]

分限をはかりて生理なり、農人は耕作を つとめとして、おのゝ年貢をかさね、職人は家業を精くして不倫の習を失ふべからず、商人は賣買をつとめて 世の利をもとめ、都て士農工商の民、各志をたゝしくすして我職をたしなみ、衣食あらく一生安穏すべ きなり、主人家をつくる長業をなして員撞日備なくして世をつくるものあり、神を信ずる人あり

食物なるを人とゝ生せしとゝ人もおてる間
なくゝ生せしてせ我る薬食とかうる人を
又女人すも生理あり古へ國王に位さへ
傷りて夜服と成るとゝ況やそれらの人の
つきゝかたるへう況乃至家の婦女も藥を好す
拵戦と楽しまる事の機あるものを達さとをとめ
はゝ嘆かうく寵愛苦をみつゝ愛し
是女の生理なる漢魔さい世てこれ人男女とも
加わり氣滯りそこの赤の年暮して腹もたるを
おてりて我り薬なるの事やとゝ人なるの事
たく目出に楽しむるを白へをたるものたれ
牧中富貴の家に生るゝ人い常親親を愛男女
たれ不足なく服ふかりたる美服をかりまとひ厚味
ありなくゝつまるものをまゝとおそれるめと
一見時楊り勢ひ去ぬれ寿を八一寿に寿と
なりぬ日こそ飽煩りてゝ仏の材藥もまく

世俗よさんうとられい御こに蒙られく庶民のうち
ひとりもたなりなるに有に成まと煙き
人の極楽をぬむこう一しかうこうれなりひは
極楽したられあるひの時美を好こ酒ひとり
ちこの隠れ遠家業をすてうかれ極楽をこう
たくいを財もつうえ朋ともすへきゆう
なるれまるひの所の意事をたくみ出しく英雄の
あふも貧をもまた極楽をぬむしていかるねとも

我職分の事を一筋のあるんの。俗人乃志あてせを
うちやと脇の事をとりこねりし人ありいるく思意を
めくすとつくも辛苦とうたうこうたなられた
はなり一事。あるあせる事なりしあれくは
名利のんりあるを思うるとをぬ者るへ。えり
貧富を賤は天命をうくあれいくくの力に
あくそのあるさたく我一商りとる職分と毎日う
ぬ事を形かくく今ゆくくとくくすす百町の

田を持つも日を食とる片心三度なる色と子間の虚と
住るも夜乃眠八尺にて足るとあれい者り我ふ
事なるべうと知る外さまとしるんある人うに成ぬ
なるこの生理とやすんをるのなる為き

毋作非為

天下より為る事とも寡まりなすとも人とも
すべて是非のふたつより是人に成理を去ることを

是と云理を背くを邪とすきれは邪のあとを
さらと非為とつまり今を是と是ふるを悪道
強盗人とまつ一生を為るあうなるものつふ及ぶ
姦婦女を淫れ男女を犯乃ひ酔狂を喧嘩を騒
私曲をいまし賄賂を貪る是あ人ろる所為と
つ人一毛を取り人一金を欲うと是非を傷せ
れ乃人を大悪とも申る者を世を世を乱し罪り
滅ふ人あり外を不ろほ家を滅る人もあり

を時より取りてちことを後悔すれども我とるべき
事にて我と受くる禍なしい雖をうらみ怪をう
とのめん御ゝり前車は覆るをみるも亦と前轍
をるんより前車後車のいましめを考へ世の後
みも蓋の轍に蓋して死に門をたてること
前りあり き事をして早意外 つぬ事や
ゆうへをたまく奉行 禍りのうとつとも
ゆをれたゝんをれ世すれ材智もあり美量もある

人れ不 紙も我は智りうりて事をたくみ
人と歌さ武と血氣りて禍を私にやらる
を高彩を考うり れ不くい地落の事りあくさ
なり又生質柔弱なる人は平生意りく月日を送る
ほとまく日これ那をさとしも高位やおりう
来れい今より後物も事のやうりりりとく
うち捨ぬる人あり大なる那う事とりへ我人雷霆
あるねられ当なるむたく一念発起てこう那を

ばかりもれい今日ちうしてらきゝとあるたとへば乃ち
ふこゝろ人の一こゝろ是を捨てゝ引ゐ世界乃り
出るのまとゝ又世ゝ人倫乃をわらうのゝ
さゝ神を信じて生おけ福を祈るもあり又仏を
信じて死後のたのしひをねがうもあり人のこゝろ
人のこゝろ神い善ゝ福ゝ悪ゝ禍といへり
さん誠あゝい形ゝすとゝくも守ゝ人ゝ乃形不善ゝく
いのゝくも何乃益ある人ゝさまゝ仏法も益出とき

貪欲をいましむるあゝすやされい儒乃ゝかゝゝ
神道仏法とゝ人ともとゝ我身の邪をやゝとゝく
手貴ゝ人ゝるまとゝ有へゝ乃ゝ乃ゝ
明ゝ之の邪いやゝゝもゝくゝゝ之の邪いやゝかゝゝと
みゝゝりたとひ和ゝ仁義をとせゝ形ゝも険悪れ
こゝろ善ゝ人を行ゝ清ゝも天をあゝむき
王法乃罪いのゝも神明の譴いのゝ屋ゝ乃されは
人ゝ乃れ行ゝ天乃譴ゝい雷ゝゝ世ゝ乃ゝ

神の見りい電とこと。何を行れたしま
さるべき。

右、論術義大意。京の係七寅九年。
公儀より彫刻せられ民間へ施され、山書物
あるいは、論語とうかい清國康熙帝の箇條を
明て人の道を教へ給ひ聲皇と
いう人を規理を推廣めく術義を作り。
主藤原惺窩先生と言ふ。
おらう人さるの人乃道理を教へ初るなり。
蒙昧の男あるいは、稚子なりとも陰字れ

學文せぬもの、傳授をなさるゝとゝ
ゆ儒者宗門新助殿、作者なれば大言を
和字にて取まぎらわし、この北山書和とかゝれ
ぬる有りしこと、御類言の事なれば、濱
國に記し、ふくもとりはやせしものなれば、
たゞ百餘年以前の人を強るよりつゞいせ
物語なれば、北山國に、彼の新さ歯を順
示しゆさる事は、但先よりやされる者の安

市舶書は、巻末の事多く、北山書和
乃理の者ゆゑ、はじめ乃ゝ者
かく生涯乃ゆい母の子と書ふ新伝
有りて、異りて伝さ弱ひ順国乃ものも
乃ゝ傳習して、御類言とゝ云ふ。
取先ふ屋ゝ者ゆゑ有よ今市舶書ゝ濱
板り刻ゝ頃ち移ふゝの也

文政十二庚寅年五月

岩村稽古所

宰邸圖書記